

弥生時代拠点集落としての西川津遺跡

田 中 義 昭*

The site of Nishikawatu as a fundamental position of settlement
in the Yayoi Period

Yoshiaki TANAKA

1. はじめに

近年、佐賀県吉野ヶ里遺跡や大阪府池上遺跡など弥生時代の大型集落遺跡の調査研究が進み、多くの注目すべき事実が判明しつつある。これらは弥生時代の地域社会構造の解明に重要な知見を与えるだけでなく、文明段階に移行する日本列島の政治的動向を探るうえでも貴重な手掛かりを与えようとしている。

一方、「地方の時代」とでもいえる弥生時代には、全国各地に独自性をもつ地域社会が形成・展開しており、これらと北部九州や近畿中央部のような先進地域社会との相互関係の総体を把握することが、弥生時代の全体相を明らかにするために必要となる。

弥生時代地域社会の構造をどのように捉えるかについては、いくつかの視点と分析方法がありえるし、また、実際にいろいろな試みが行なわれている。その中で有効な一つの方法に集落遺跡を対象とするアプローチがあり、周知のような諸成果が蓄積されてきた。筆者もその一翼に参画して考察を公にしてきたと

ころである（田中、1976年、1983年他）。

本稿では、かつて試みた「拠点集落」構想の具体化、検証の作業として出雲域の大型集落遺跡の一つである松江市西川津遺跡をとりあげて、当地の弥生時代拠点集落の諸様相と特性について考察し、もって上記の全体課題解明の一助にしようと思う。

2. 松江市西川津遺跡の概要

〔所在地〕松江市西川津町字海崎・大内谷・宮尾坪内・原ノ前

〔立地〕松江市北東部にある持田平野の南縁に位置している。立地場所は、平野の南寄りを北東方向から南西に向かって流れる朝酌川沿の沖積地で、これまでの調査結果からすると、集落は丘陵裾部から平野の微高地部分に営まれたと考えられる。現状では、遺跡はほぼ南北に帯状に形成されてたとみられ、その広がりには南北約1km、東西約200mと推定される。

〔遺構と遺物〕朝酌川の河川改修工事にとともに、島根県教育委員会により1980年から1995年までに数次にわたる調査が実施され、現在も継続中である。この間検出された遺構

* 島根大学法文学部社会システム学科
考古学研究室

群には縄文時代前期の土壌群、弥生時代前期の溝、ウッドサークル、同中期の掘立柱建物跡群、土壌群、ウッドサークル、貯蔵穴、古墳時代の船着場跡、奈良・平安時代と中・近世の掘立柱建物跡等がある。また遺物も各時代各種の多様で膨大な量のもので出土し、遺跡自体があたかも考古博物館の如き様相を呈している。とくに注目されるのは、有機質の遺物の保存状態がすこぶる良好で、それぞれの時代の村落生活のありようの具体的究明に新たな手掛かりを提供していることである。

ここで分析対象とする弥生時代の遺構と遺物は、遺跡の北端部に当たると思われる海崎地区と、その南方の宮尾坪内地区一帯で検出されている。長期にわたって形成された本遺跡の出土遺物中에서도弥生時代に属するものは全体の六～七割を占めており、西川津遺跡が当該時代の大規模な集落として存在したことを示唆している。これまで持田平野には、考古学的調査が行き渡っているとは必ずしもいえないが、西川津遺跡に匹敵する弥生時代の遺跡は発見されていない。これらの事実を併せ考えると西川津の弥生集落は平野全体の集落群の中核的存在、すなわち拠点集落であったと把握しうるように思われる。よって以下にこのことを実証的に考察することにしよう。ただし、遺跡の調査範囲が河川改修部分に限られていることと、低湿地のために遺構の把握に制約があったことをあらかじめ考慮しておかなければならない。

3. 海崎地区と宮尾坪内地区

筆者は、弥生時代の拠点集落を性格づける要素として次のような諸点を考定するべきであることを述べた(田中, 1996年)。すなわ

ち、i) 複数の「単子集落」を内包すること、ii) 集落に一定期間の継続性が認められること、iii) 農耕具や金属器等の生産用具生産を行った手工業的場であること、iv) 農耕祭祀の場であること、v) 首長的身分の人物の存在が想定できること、の5点である。

これらの諸点を、広大な西川津遺跡で弥生時代の遺構・遺物が多数・多量検出された海崎地区と宮尾坪内地区の2地区について、それぞれの遺構のありかたと出土遺物の様相について検討することにより、拠点集落としての西川津遺跡の特性を追求しよう。

1) 海崎地区

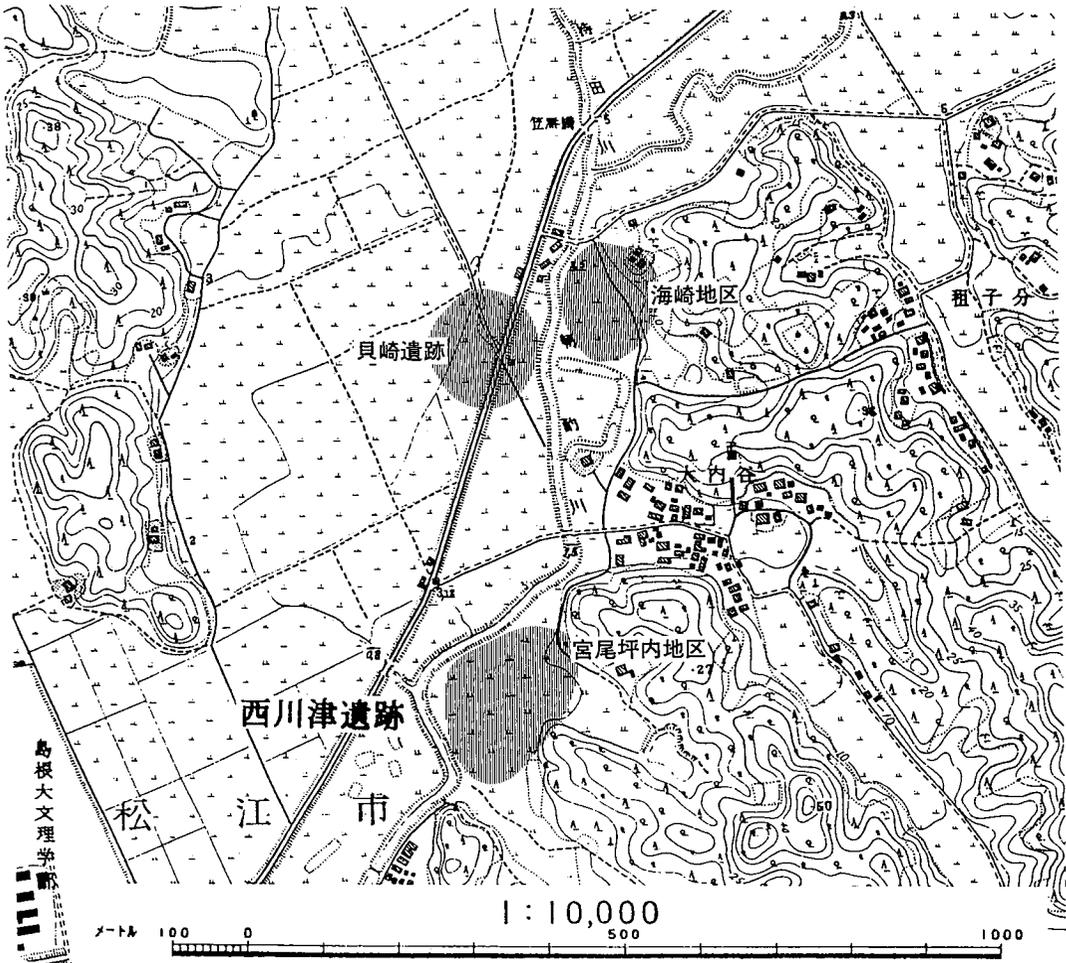
〔集落の範囲〕北東から南西に帯状に広がる持田平野は、その北部が東持田丘陵によって二又に分かれている。西側の谷平野を持田川が南下し、東側は朝酌川が流れる。この二小河川は笠無橋付近で合流し、蛇行を繰り返しながら下流に向かっていく。合流点の南側には、北方に向かって指を広げたように張り出した丘陵の一つ租子分丘陵(仮称)があり、川の流れはこの先端に触れて西方向に変わる。こうして丘陵先端の西側には懐状になった沖積地が出現するが、これが大内谷の北側に隣接する海崎谷(仮称)で、遺跡は主として谷口の丘陵裾平坦面から前方の微高地上に形成されたと考えられる。ここには、現在でも西に開いた「コ」字形に旧河川が残っている。流速が緩く、蛇行がかなり激しかった状況を示すものであろう。近世には「海崎灘」と称された船着場があったとされているが(井上, 1987年)、その位置はこの海崎の「やと」の出口付近であったと思われる。

こうした低い土地でも洪水の危険が比較的小さい個所に初期農耕集落が立地することは特徴的な事実といってよく、海崎地区の弥生

集落も、まさにそうした地点に意識的に選地されていたとみられる。ここで問題となることは、i)として示した点に関してである。上記のように西川津遺跡では弥生時代の住居址群は捉えられていない。したがって地形や遺物の出土範囲、あるいは若干の検出遺構群から集落の広がりやを推定することにならざるをえないのであるが、考えられる居住範囲は丘陵裾の平坦部とその前方に広がる微高地上に求められよう。そこでの遺物の出土と若干の遺構の存在を手掛かりに集落の広がりやを想定しよう。

まず、北限については租子分丘陵の先端と朝酌川が近接する海崎橋付近にあることは1982年の調査で確認されている(内田他, 1988年)。1983年の調査区では丘陵裾平坦地(標高約3m)に掘り込まれた弥生中期のドングリ貯蔵穴が検出されている。

南限は1985年に行われた調査の際、発掘区の南端近くにおいて弥生前期、中期の掘立柱建物跡、「ウッドサークル」と「貝層」(小ブロック貝塚の称、以下この表現に従う)が検出されたことや、朝酌川の旧河道とされる北々西-南々東方向の溝状遺構(弥生前・中



第1図 弥生時代の西川津遺跡

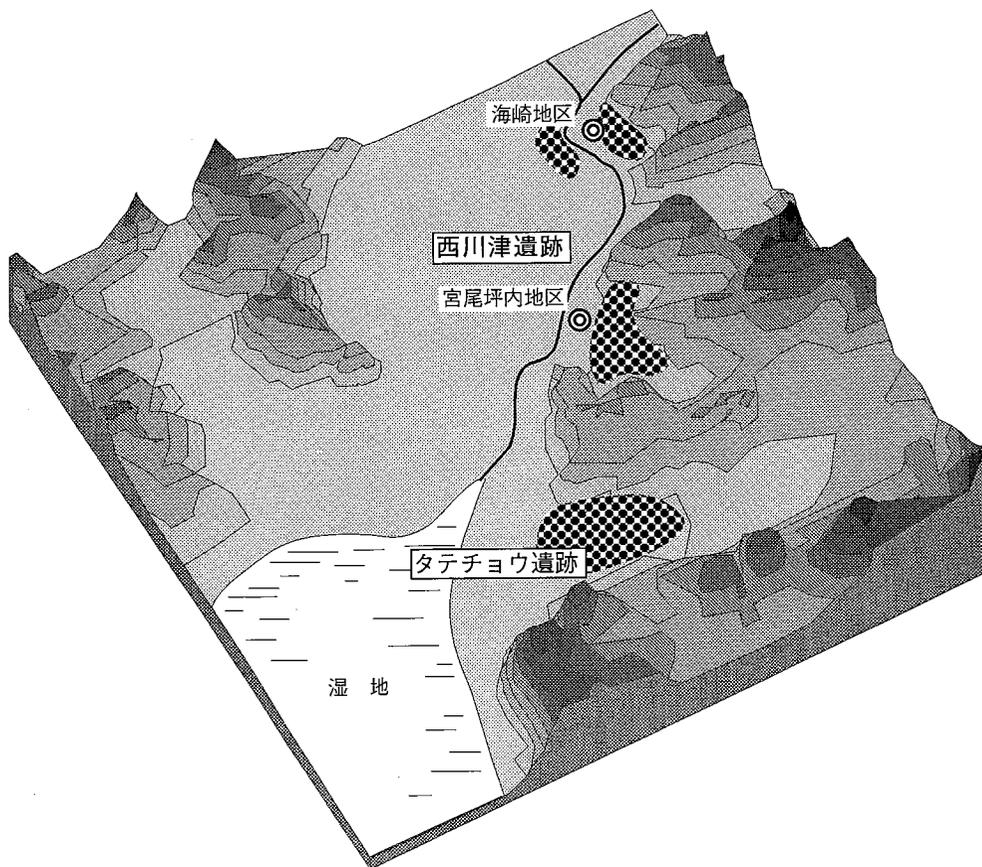
期)が検出されていることから、この一帯に求めうる可能性がある(内田他, 1989年)。なお、この溝状遺構は弥生後期前には埋没し、その南からは同期のものとされる貝層と列石遺構が検出されているので、弥生後期に集落範囲が拡大されたことが考えられる。

東限については詳らかにしえないが、1985年の調査区で検出された遺構群に手掛かりを見出したい。これらの遺構群は丘陵裾部前面の緩傾斜地上に残されている。その傾斜面は、やがて朝酌川の左岸に達しているものと思われるが、このような状況からすれば、遺構群の存在する個所は集落全体の南西縁に当たることが考えられ、したがって集落の中心部分

はより東から北東部分に存在すると判断される。とすれば東限は、ほぼ丘陵裾近くに想定してよいであろうか。さらに、西限は朝酌川の流れによって限られていたとしてよい。

このように四至を設定しうるならば、海崎地区の弥生集落の広がりには、径およそ130～150mの略円形の範囲に収まると考えられることができる。1～2の「単位集団」を内包することが可能な範囲と見てよい(第1図、第2図)。

なお、ここで注意されることとして現在の国道431号線と島根町方面に向かう県道の交叉点付近からかなりの弥生土器(前・中・後期のもの)や石器(大型蛤刃・柱状片刃・環



第2図 タテチョウ遺跡・西川津遺跡の弥生集落群の分布(中村唯史氏作図)

状の磨製石斧等)が採集されていることを上げておく必要がある。位置的には朝酌川の右岸付近に当たり、当然のことながら1985年調査区の西側で、旧河道の溝状遺構を越えたところになる。対岸に別の弥生集落が展開していたことを予測させる重要な事実と受け止めるべきであろう。遺物出土は貝崎遺跡と命名されている(内田他, 1987年)。

〔集落の継続性〕屢々触れるように、本遺跡では住居址等の遺構があまり検出されていないので、勢い集落の継続性を測る手段は土器型式の連続性から想定することになる。出雲域における弥生土器の編年研究に関する最近の達成として松本岩雄氏の労作がある(松本, 1992年)。いま、これに準拠して海崎地区出土の弥生土器の型式的連続性をみよう(第3図-1, 同図-2)。

弥生土器として当域最古式とされる第I-1様式の土器は未確認である。しかし、下流のタテチョウ遺跡では検出されており、将来西川津遺跡で出土する可能性は大いにあると思われる。第I-2様式以降第V様式に至る諸型式の土器はすべて見出され、様式間のつながりについてもほとんど断続状態は認められない。このことは、例えば第I様式から第II様式への展開については、甕形土器の口縁部下に施される平行沈線文の多条化傾向の中に、あるいは第III様式から第V様式への移行については、やはり甕形土器の口縁部の発達状況に見て取ることができることである。少なくとも、土器型式の連続的展開からすれば集落の継続性は弥生時代の全期間を通じて保持されていたといえる。

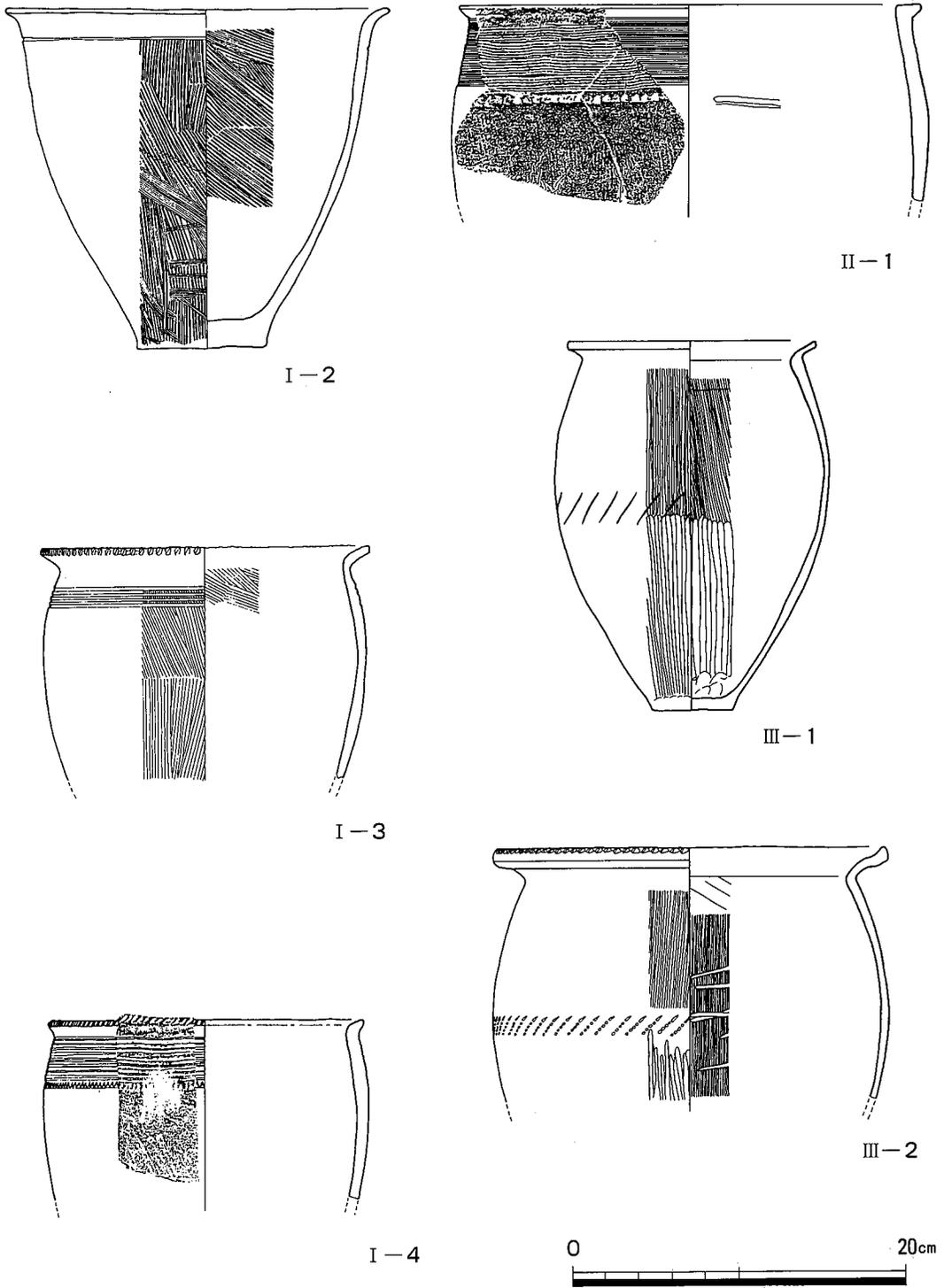
〔手工業生産〕西川津遺跡の顕著な事実として大量の木製品(未成品や完成品を含む)の検出されたことがあげられている。それら

の大部分は弥生前・中期に属し、ここが木器生産の拠点であったことを伺わせている。海崎地区では原木、割材、半成品、完成品が多数出土しているが、木器の種類としては農耕具類(「広鋤」、「狭鋤」、「丸鋤」、「叉鋤」、「田下駄」)、容器類等がある。これらには板材から製品化される諸過程を詳細に辿れるものがあり、また原木を貯蔵したとみられる土壌の存在とも併せて、当区での木製農耕具の生産活動を具体的に把握することができる。木製品生産は農耕具以外にも建築材、祭祀品、装身具類にも及んでいるが、当面注目されるのは農耕具類の大量生産であろう。

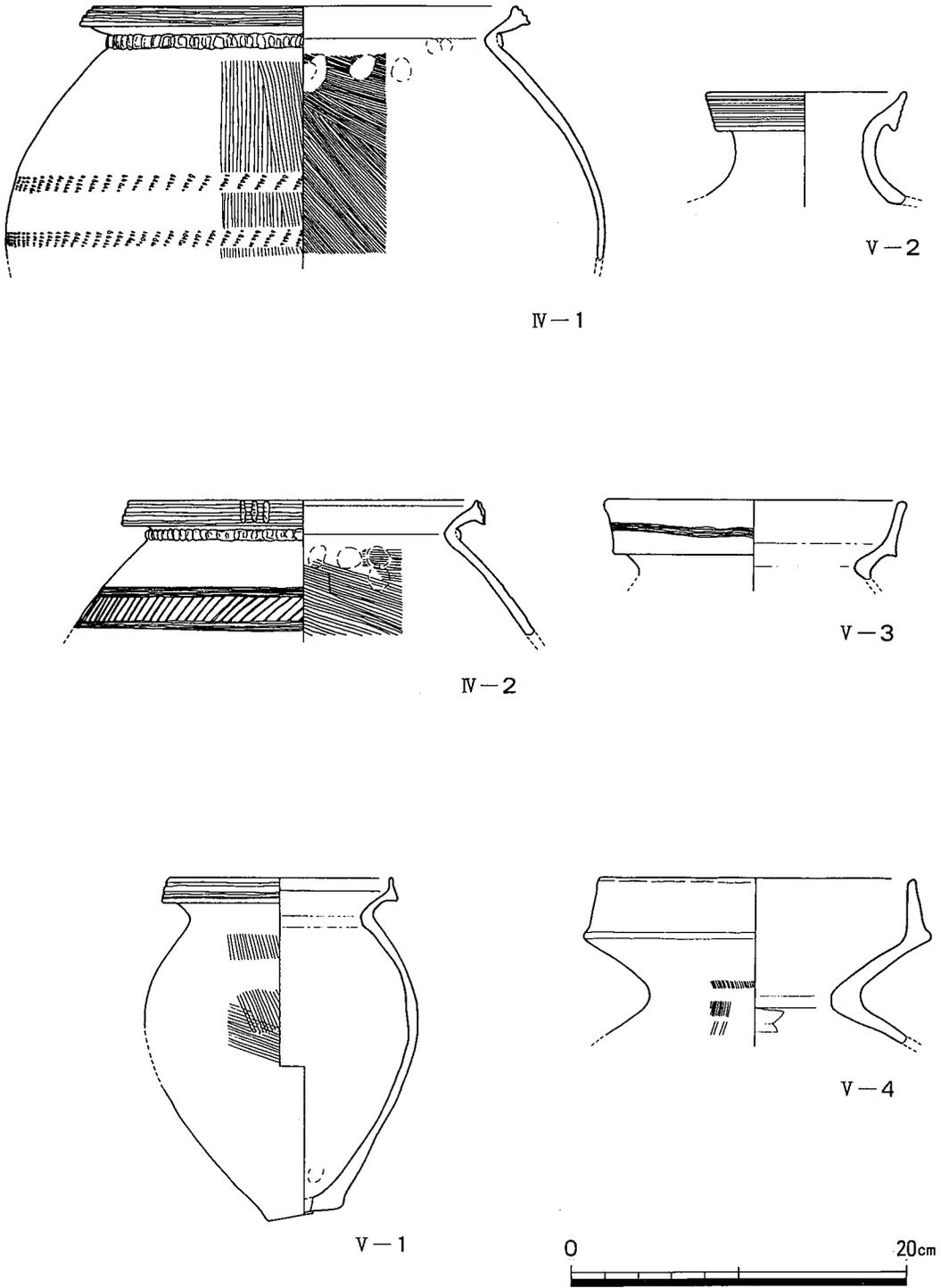
これらの木器生産の工具となる各種磨製石器の出土量も、また、豊富である。生産拠点との関わりでは、とりわけ大型蛤刃石斧の大量出土が目を引く。同時に大型蛤刃、挟入柱状片刃等については原石→荒割→研磨の製作過程を示す資料がえられていて、これらの磨製石斧類が海崎の集落内で生産されていたことが知られる。こうした基幹的工具の生産も拠点性を伺う重要な要件である。

その他にも漁撈具(鹿角製釣針、刺突具等)の製作、緑色凝灰岩を用いた管玉の生産についても、材料から完成品に至る各製作段階の資料が出土しており、海崎の弥生集落を生産用具生産を中心とする総合的な手工業場として認定することができる。

〔集落内祭祀〕海崎地区から土笛16個が出土したことは、この遺跡の特性を印象づける一要素となっている。ほとんどが弥生前期のもので、一遺跡からの出土数としては本邦最大である。また、穿孔のあるイノシシの下顎骨も祭祀関係遺物として近年注目されているものである。12固体が出土している。鳥形木製品も同様の性格が想定される遺物といえよ



第3図-1 西川津遺跡・海崎地区出土の弥生土器（甕形土器）変遷図1



第3図-2 西川津遺跡・海崎地区出土の弥生土器（甕形土器）変遷図2
（内田律雄他，1988年，1989年より）

う。その他にヒョウタンを利用した文様入りの容器、透し彫りのある「装飾品の頭部」、透し彫りを施した把手を着けた木製の鉢等も日常的な器物とするよりも特殊な用途にも用いられた器具である可能性が高い。

いま、これらの祭祀的遺物から集落内で行われたであろう祭祀の具体像を復元的に考察する用意と余裕はないが、少なくともある種の農耕祭祀が実施されたことを想定するに十分な遺物の出土があることを確認しておきたい。

〔首長定在〕海崎地区出土のゴホウラ製貝輪の存在も西川津遺跡の名を広めている。弥生前期末を下限とする貝層Ⅰから検出されたもので「諸岡型」とされる。同貝層からは成人の左大腿骨も採取されている。調査時には埋葬施設のようなものは確認できなかったとされる。二次的変異を受けた可能性が考えられるにしても貝輪と人骨の間に共伴関係を想定しうる蓋然性は高いと思う。

ちなみに、貝層Ⅰからは貝製薄玉14個が検出されている。他の貝層からもアカガイ製貝輪や多数の貝製薄玉が検出され、貝層Ⅱからは「成長途上」の女性人骨と貝製薄玉19個がえられた。こうした事実は貝層の形成と埋葬地の選定に有機的な関連があったことを伺わせる。時期はいずれも弥生前期とされるが、中期の貝層からも同類の玉が採取されている。

ゴホウラ製貝輪の性格に関しては木下尚子氏、高倉洋彰氏等の研究があり（木下、1989年他、高倉、1975年他）、これが南海産の貝を利用したもので、北部九州を中心に分布すること、それを着装する人物が弥生時代の地域社会の首長の身分の者であることが解明されている。海崎地区出土のゴホウラ製貝輪も北部九州方面から入手されて、この弥生集落に

居住する首長の腕に嵌められていたことを示唆している。

〔交流・交易〕ゴホウラ製貝輪とともに海崎地区からの出土遺物中で注目されるものに鑄造鉄斧がある。貝層Ⅱ付近から発見されたようで、弥生中期のものという。このような鑄造鉄斧は、北部九州を中心に本州西部から近畿地方に分布し、生産地として中国東北部から朝鮮半島西北部が考えられている（村上、1994年）。西川津遺跡・海崎地区出土例も、直接的か間接的かの判断は難しいが、かの方面から舶来されたものということになる。

その他でも石剣・石戈・扁平磨製石鏃等の武器、石鎌・石包丁等の農具、結合式釣針・アワビオコシ・石錘等の漁具にも北部九州との直接・間接の交流・交易の様子を伺うことができるという（下条、1989年他）。海崎地区弥生集落が内外の交流・交易センターとしての役割を果たしていたものと考えられよう。

2) 宮尾坪内地区

この地区は、1979～81年に発掘調査が行われて、大量の弥生土器や農具等の木製品が出土。さらに1995年にも西川津遺跡の継続的調査の一環として発掘調査が実施されているが、その成果報告は未刊であるため、ここでは1979～81年の調査を中心に予察的な検討を試みておきたい。

〔集落範囲〕海崎地区で試みたようなやり方で集落範囲の四至を想定してみる。北・西・南を限る最大の条件は朝酌川の流れてである。まず、北限については次ぎのように考えられる。大内谷の谷口付近で西側に膨らんだ流れは再度蛇行して川津小学校北の丘陵先端に衝き当たっている。そこで再々度西南向きに流路を変えていく。このコースは弥生時代以降も大きくは変化していないことが調査で確認

されている(西尾他, 1995年)。したがって集落の北側への広がりは大内谷丘陵の先端から流れの屈曲部辺りに求めることができる。

西の限界は、大きく西側に湾曲する流れの内部ということになる。1978～81年の調査では西に傾斜する砂利層を中心に遺物が検出されているが、この層は朝酌川左岸に近い個所に洪水によって形成された遺物包含層と判断されている。

南限は現在の学園橋付近とすることができる。再々度西に膨らんだ流れは、また南東方向に転じて学園橋南東の丘陵先端に衝き当たる。そこで、またまた南西方向に流路を変えるのであるが、その屈曲部も1994年の調査で検出された。つまり、この宮尾坪内地区も先海崎地区同様朝酌川左岸で、流れが弓状に西膨らみする個所に集落が存在したと想定されるのである。問題は東限であるが、現状ではこれは確認できない。しかし、海崎地区で推定したように、谷奥からの小流と朝酌川の流れによって合成された砂洲状の微高地とそれに続く丘陵裾部にあった可能性がある。四至が、以上のように推定されるならば、集落の範囲は径約160m程度として捉えることができよう。やはり1～2の「単位集団」の存立が可能な広がりとしてよいであろう。

〔集落の継続性〕この地区では調査区内において何等の遺構も検出されていない。また、遺物の出土は砂利層を中心としており、これは二次的な堆積層と判断されている。よって集落の継続性を明確な形で考察することには困難があるが、海崎地区での試みを採用するならば、出土土器については、ほぼ弥生前期から後期へと連続する態を見出すことができるように思われる。ただし、第I-1様式は存在しない。

〔手工業生産〕木製品、とりわけ耕具類の大量出土が注目されるが、それらには加工途上のものが多数含まれ、「丸鋏」の如きは数段階の製作過程を示す資料がえられている。宮尾坪内地区で木性農耕具の生産が行われたことは明瞭である。その他にも打製石鏃や石包丁が製作された可能性もある。なお、本区でも鳥形木製品が出土していることを付記しておこう。

4. 拠点集落としての西川津遺跡の検討課題

以上、朝酌川左岸で検出された二地区の弥生時代集落址について、その様相と特徴点を検討してみた。海崎地区では筆者が弥生集落の拠点性として考定したi)～v)の要件がすべて満たされており、かつ交流・交易拠点としての性格も想定され、この地区の弥生集落が持田平野に展開した農耕的地域社会の拠点となる性格を帯びていたことは、かなりの確かさをもって認めてよいであろう。問題は、これらの諸要件が相互にどのように連動しあい、そのあり方が集落構成や地域特性の形成とどう関連するのかがである。このような検討と考察を経て、初めて拠点集落としての西川津遺跡の意義が明らかになると考えられる。そこで当面検討すべき課題を以下に示して結語に代えたい。

①海崎地区の集落に拠点性が見出されることは上記のとおりであるが、この地区に近接する貝崎遺跡や宮尾坪内地区の集落との関連はどのように理解されるべきであろうか。朝酌川の流れを、いわば共有するような占地をとるこれらの集落群が孤立分散状態にあったとは到底考えられない。とすれば、一ブロッ

クとして捉えることが必要になってくる。今後の調査が予定される宮尾坪内地区の調査に期待もたれる。

②今後の調査の成果をうけてのことであるが、拠点性の内容が立体的に把握されるならば、そのような性格がいつどのようにして形成されたのかも大いに問題となるところである。この点は地域性の評価にも関連してくる。

③海崎地区、貝崎遺跡、宮尾坪内地区のいずれも弥生後期の動向がいまひとつ不明である。出土遺物の種類・量共この時期のものは少ないように見受けられる。古墳時代前半期の遺物の量が比較的多いことと併せて検討が求められるところである。

④弥生中期中葉以降期の集落のあり方と関連して、また拠点性をもっとも明瞭に示す要件として金属器生産の問題がある。この点はかなり目的意識的な追求が必要であろう。

中海・宍道湖低地に広がる弥生集落遺跡は有機物の保存度において、きわめて優れており、その調査研究は、当該時代の農耕生産と交流、あるいは社会生活のありようの具体的な把握に画期的な解明の道を開くにちがいない。小論がそうした研究へいささかでも貢献ができれば筆者の意図は達成される。

参考文献

- 井上寛司 1987年「中世の朝酌川流域—西川津地域を中心として—」(内田律雄他『朝酌川河川改修工事に伴う西川津遺跡発掘調査報告書Ⅲ(海崎地区)』島根県土木課・島根県教育委員会)
- 内田律雄他 1988年『朝酌川改修工事に伴う西川津遺跡発掘調査報告書Ⅳ(海崎地区2)』島根県土木河川課・島根県教育委員会
- 内田律雄他 1989年『朝酌川改修工事に伴う西川津遺跡発掘調査報告書Ⅴ(海崎地区3)』島根県土木課・島根県教育委員会
- 木下尚子 1989年「南海産貝輪交易考」(『横山浩一先生退官記念論文集Ⅰ 生産と流通の考古学』所収) 横山浩一先生退官記念事業会
- 下条信行 1989年「島根県西川津遺跡からみた弥生時代の山陰地方と北部九州」(『西川津遺跡発掘調査報告書Ⅴ』所収)
- 〃 1989年「弥生時代の玄界灘海人の動向—漁村の出現と役割—」(『横山浩一先生退官記念論文集Ⅰ 生産と流通の考古学』所収) 横山浩一先生退官記念事業会
- 高倉洋彰 1975年「右手の不使用—南海産貝製腕輪着装の意義—」(『九州歴史資料館研究論集』1所収)
- 田中義昭 1976年「南関東における農耕社会の成立をめぐる若干の問題」(『考古学研究』87)
- 〃 1983年「南関東における初期農耕集落の展開過程」(『島根大学法文学部紀要文学科編』5-1)
- 〃 1984年「弥生時代集落研究の課題」(『考古学研究』123)
- 〃 1996年「弥生時代拠点集落の再検討」(『甘粕健先生退官記念論集 考古学と遺跡の保護』所収) 甘粕健先生退官記念論集刊行会
- 西尾克己他 1995年『朝酌川中小河川改修工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 原の前遺跡』島根県教育委員会
- 松本岩雄 1992年「出雲・隠岐地域」(『弥生土器の様式と編年—山陽・山陰編—』) 木耳社
- 村尾秀信他 1975年『朝酌川改修に伴う西川

津遺跡発掘調査報告書Ⅰ』島根県教育委員会

〃 1982年『朝酌川改修に伴う西川津遺跡発掘調査報告書Ⅱ』島根県教育委員会

村上恭通 1994年「弥生時代中期以前の鑄造鉄斧」(『先史学・考古学論究熊本大学文学部考古学研究室創設20周年記念論文集』所

収) 龍田考古会

本稿を起すに際しては総合理工学部地球環境学科の徳岡隆夫教授、同研究生中村唯史氏から教示と援助を受けた。また挿図作成では法文学部文学科考古学専攻生細田美樹さんの手を煩わせた。共に記して感謝を申し上げる。

